

令和 5 年 5 月 16 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K19941

研究課題名（和文）ショパンの楽器学 4つの《バラード》とプレイエルの関係を中心に

研究課題名（英文）Chopin's organology: focusing on the relationship between four Ballades and Pleyel's instruments

研究代表者

松尾 梨沙 (Matsuo, Risa)

東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員

研究者番号：80909846

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本課題はF. ショパンの作曲と、彼が使用したピアノとの関係に注目したものである。特に彼が愛用したプレイエル社製ピアノはシングルエスケープメント機能であり、1830年代以降エラール社が開発したダブルエスケープメントに比べると、未だ急速な同音連打がしにくい楽器であった。こうした楽器の特性が、彼の《バラード》op. 38のコーダに代表されるような和音連打の演奏にどう影響するかに焦点を当てたが、結果として、スピード感ある連打よりも一個一個和音を掴むような演奏法が適すること、彼がワルシャワ時代に使用していた楽器の打鍵感覚の影響が後半生まで残った可能性があること、この二点が考察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の重要な意義は、「19世紀前半の欧州では現代のピアノと様々な面で機能の異なる楽器が使われており、さらに音楽家（ショパンかそれ以外の作曲家か）によっても、好んで用いられた楽器の特徴が異なる」という点である。現代のピアニストたちがこの点を踏まえることで、同じショパンの作品でも演奏解釈に広がり生まれ、演奏困難に思われた箇所でも当時のピアノの特徴を知ること、その困難を解消できる可能性が生まれてくる。

また、本研究遂行の拠点となったパリ音楽博物館の楽器展示・演奏企画は大変参考になったため、そのノウハウを、今後は日本の音楽博物館の楽器活用や、子供や一般向け企画の充実にぜひ繋げていきたい。

研究成果の概要（英文）：This research project focuses on the relationship between Fryderyk Chopin's compositions and the pianos he actually used. In particular, the Pleyel piano which he loved had a single escapement function, and compared to the double escapement developed by Erard since the 1830s, it must have been an instrument that still made it difficult to hit the same keys rapidly. I focused on how the characteristics of this company's instruments affect the performance of repeated chords, as typified by the coda of his Ballade op. 38.

The results suggest the following two points: 1) it is possible that a performance in which each chord is grasped one by one is more suitable than a series of speedy hits, 2) the influence of the keystroke feeling of the instruments he used in Warsaw up to 1830 may have remained until the latter half of his life.

For this research, I would like to thank Ohtagaki Piano Studio and Musee de la Musique de Paris for their particular cooperation.

研究分野：音楽学、比較芸術

キーワード：ショパン ピリオド楽器 プレイエル エラール シングルエスケープメント ダブルエスケープメント バラード パリ

1. 研究開始当初の背景

国際的・学際的研究がますます推進される現代では、ショパン研究においても学際的・比較文化的視点が必要となり、こうした考え方はワルシャワにあるポーランド国立フリデリク・ショパン研究所（以下 NIFC）にも浸透してきている。NIFC の学際的企画の顕著な例が、2018 年にワルシャワで初開催され、以降 5 年毎の開催が予定される「ショパン国際ピリオド楽器コンクール」である。すでに世界的に知られるショパンコンクールと異なり、このピリオド楽器コンクールは、ショパンが実際に使用した楽器、あるいはそれと同型の楽器複数種の中から、コンテスタントが演奏曲目に適すと考える楽器を自ら選択することで競われる。このコンクールの目的は、現代ピアノの演奏で一様な価値基準に走る傾向にある昨今のピアノコンクールに対し、演奏家自身が立ち止まり、ショパンの時代の楽器から考察すること、つまり時代考証や一次資料研究など、ある程度の学術性を伴う姿勢を演奏家自身に求めるものといえる。

2018 年のこの第一回コンクールを視察した報告者は、ショパンが円熟期に最も愛用したプレイエル社製のピアノが、同時代に他の作曲家たちに愛用されたエラーール社製のピアノと異なる特徴を持っていたことに注目した。エラーールは 1830 年代に「ダブルエスケープメント」という、同音連打の演奏がしやすくなる機構を開発したことで、多くの音楽家が愛用したのに対し、プレイエルは従来の「シングルエスケープメント」機構を保持し続けていた。一般的には、楽器の機能が発展し、より弾きやすくなる方を好むと想像されるのに対し、なぜショパンがプレイエルにこだわったのかに、報告者は興味を持ち始めた。

2. 研究の目的

具体的には 1830 年代末以降の時代に焦点を当てた。ショパンにとってはこの 1830 年代末～1840 年代初頭が、彼の作品が規模的にも様式的にも独創性を強めるまさに転換期にあたり、それに彼の愛用した楽器が大きく関与していることが考えられる。よってこの 1830 年代末～1840 年代初頭に用いられた楽器に対し、書かれた作品（特に《バラード》op. 38、《前奏曲集》op. 28）との対応関係を考察することで、彼の作品を理論的かつ技術的にどう弾き分けるべきかを明らかにすることが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

1. で述べたように、ショパンが 1830 年代以降のパリ時代に特に愛用していたプレイエルは、エラーールに比べると同音連打がしにくい。しかしながら彼が 1830 年代末に作曲した《バラード》op. 38 の終結部は、重音の連打がひたすら続き、ピアニストにとっては現代のピアノで演奏しても技術的に困難を要する部分とみなされている。また同時期に作曲されている《前奏曲集》op. 28 の中でも、スピードは要求されないものの特徴的な同音連打の書法が複数の曲で見られる。これらの作曲時期は、ショパンのマヨルカ島滞在期、つまりプレイエルのピアニーノ（アップライトピアノ）が使用された時期にも重なるため、ショパンにとってどういう意味があったのかという興味が強まった。

そこで本研究課題一年目は、日本で同時代のプレイエル、ないしシングルエスケープメントの機能を持った楽器を所有し、修復を行っていた、楽器製作・修復家の太田垣至氏の工房を訪ね、それらの楽器を実際に触らせてもらうこととした。加えて太田垣氏と議論を行い、楽器製作側から見た太田垣氏の見解も伺った。コロナ禍が収まりきれない 2021 年度末に訪問したところ、コロナ禍以前に所有されていたプレイエルのピアニーノがすでに売却済であったため、マヨルカ島時代のショパンが使用したピアニーノに非常に近い楽器に触れることは叶わなかったが、他のシングルエスケープメントの機能を持つ楽器（主にウィーン式）があり、それらを実際に報告者が試弾した。

本研究課題二年目については、特に 9 月以降は報告者が JSPS 海外特別研究員としてパリに赴任することとなったため、パリの音楽博物館（Musée de la musique）に所有されている、1700 年代末の楽器から 1850 年代頃までのプレイエル、エラーールについて、実際に音を聴き比べ、また博物館の専属演奏家や楽器専門家によるワークショップにも参加し、彼らの講演や具体的な見解も伺った。

4. 研究成果

研究課題一年目に行った、シングルエスケープメントの機能を持つ楽器（主にウィーン式）試弾と、太田垣氏との議論の結果、以下のことが考察された。

まず太田垣氏からは「同音・同和音連打自体はショパンに限らず、彼の前の時代や同時代の作曲家にも用いられていたため、シングルエスケープメントだからといって連打の演奏が当時不可能だったわけでも、特別難しいと感じられていたわけでもないように思う」との見解を頂いた。

これはもっともであり、つまりずっとその機能しか知らなかったショパンが、あえてその時代に登場した「もっと弾きやすいエラール」を必ずしも好まなくても、確かに不思議はない。では、ショパンがそれでも同音連打を多用したのは、むしろ「シングルエスケープメントだからこそ理由」があったのではないだろうか。このことを報告者は考えながら、実際にシングルエスケープメントの楽器を試弾した。その結果、次のように考えられた。

例えば op. 28 の第 4 番は、左手の同和音連打がひたすら続く作品である。そもそもこの連打は決して速さも音量も必要ないが、和声分析の側面でこれまで多くの研究者の議論を呼んだ、特異な漸次的・半音階的進行を持っている。結果的にここでは和音一つずつの価値が、単なる「連打」以上のものであることがわかるが、それにシングルエスケープメントによる「和音の掴み方」が関わるのではないかということ、報告者自身の実演検証で確認できた。和音連打による音色の漸次的変化の手法は op. 28 の第 13 番や第 15 番など他の曲にも当てはまり、また今回の確認から、本研究の最重要課題である op. 38 終結部の右手の重音連打について、この箇所は現在大多数の演奏家が行うような迫力とスピード感で演奏するものではなく、本来は一つ一つの「和音の掴み方」の方に圧倒的に意味があった可能性が高いと考えられた。

次に研究課題二年目に行った、パリの音楽博物館所有のウィーン式楽器、プレイエル、エラールの聴き比べと、博物館の演奏家や楽器専門家の意見聴取の結果、以下のことが考察された。

まず、プレイエルの実演を披露した博物館の演奏家に、同楽器での重音連打について見解を伺ったところ、「そもそもショパンは、プレイエルを愛用していたとはいえ、他のイギリス式ダブルエスケープメントのピアノの機能も十分に知っていたので、重音連打がより簡単にできることも想像しながら作曲できたと思う」とのことだった。この見解ももっともであるが、「より簡単になることを想像」しながら、あえて「より簡単ではない楽器」で作曲し続ける理由とは何だろうか。それでも「より簡単ではない楽器」にしかない何らかの長所があった、ということではないだろうかと思われた。その点で、楽器専門家の方が発言した、「ショパンがパリに来る前に使っていた楽器は "école germanique" のもので、そもそも系譜が違う」という指摘の方に、より重要性があるように思われた。

申請者はパリに来るまで、ワルシャワのショパン国際ピリオド楽器コンクールを中心に見ていたが、その結果「ショパンが生涯で使用したピアノ=NIFC が集めたピアノ」の視点しか持ち合わせていなかったことに、この指摘で気づかされた。つまり、ショパンは前半生の約 20 年間はポーランドのピアノを使用していたのであり、それらのピアノは、フランス側の視点に立つと、彼らとは系譜の異なる "école germanique" (グラーフやブッフホルツといったゲルマン系、ウィーン式ピアノ) であった。これらは、1830 年代頃頃から様々に改良を重ね、ピアノ製作の一大中心地となったフランスにとっては「旧式」「保守」の印象が強い楽器、ということになる。もちろん本研究課題は、ウィーン式が旧式であることはあらかじめわかっていた上で開始したものであったが、問題は、そうした楽器を使い慣れた状態でパリに来たショパンが、どんなにピアノの発展を目の当たりにしても、プレイエルのようにシングルエスケープメントを保持し続ける楽器の方が、自分が身体的に記憶している打鍵感覚に「馴染む」と感じた可能性があるということである。

博物館にあった 1844 年製エラールと、ショパンが実際に所有した 1839 年製プレイエルを聴き比べたところ、確かにエラールのダブルエスケープメントは速く何重にも音が出るが、その分騒がしい印象も強く、加えてピアノの音自体がより鋭かった。他方でプレイエルはこころと丸い音で、一音一音の魅力がはっきり主張される。つまりエラールよりもプレイエルの方が、個々の音の重要性がより高い、という可能性が指摘できる。

以上から、ショパンの作品の「同音連打」、特に op. 38 の終結部のように、現在ではとかく速く激しく演奏される傾向にある同音連打でさえ、スピードよりも個々の和音に重要性を置く必要があることがわかった。まずは個々の和音を掴むように演奏すること、また強弱やスピードの点で、個々の和音の前後のコンテクストを熟慮し、一つ一つどのように表現するべきかの解釈を決定した上で演奏することが求められる、という結論に至った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 松尾梨沙	4. 巻 64
2. 論文標題 【書評】佐藤英/大西由紀/岡本佳子編『オペラ/音楽劇研究の現在 - 創造と伝播のダイナミズム』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『比較文学』	6. 最初と最後の頁 p. 109-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 MATSUO, Risa	4. 巻 43
2. 論文標題 Aspekty dramatyizacji w balladach Fryderyka Chopina w odniesieniu do form romantycznej ballady literackiej	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Litteraria Copernicana	6. 最初と最後の頁 p. 149-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.12775/LC.2022.039	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 松尾梨沙	4. 巻 108
2. 論文標題 あとがきのあとがき	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 比較文学研究	6. 最初と最後の頁 p. 53-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 松尾梨沙
2. 発表標題 ショパンによる「幻想」 - 文学作品との関係をめぐり一考察 -
3. 学会等名 日本比較文学会東京支部7月例会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 MATSUO, Risa
2. 発表標題 "Fantaisie" selon Frederic Chopin : Une analyse comparative avec les oeuvres de George Sand et Adam Mickiewicz
3. 学会等名 21st Quinquennial Congress of the International Musicological Society (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Fondation Maison des sciences de l'homme (fr) https://www.fmsh.fr/chercheurs/risa-matsuo Fondation Maison des sciences de l'homme (en) https://www.fmsh.fr/en/researchers/risa-matsuo UTokyoBiblioPlaza : ショパンの詩学 ピアノ曲《バラード》という詩の誕生 https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/A_00147.html UTokyoBiblioPlaza : Chopin's Poetics https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/en/A_00147.html</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
フランス	Musee de la musique		